

## テモテへの手紙第一5章「主に任された難しい判断」

### 1A 家族としての指導 1-2

### 2A 教会の助けるやもめ 3-16

#### 1B 本当のやもめ 3-8

##### 1C 身寄りのないやもめ 3-5

##### 2C 自堕落なやもめ 6-8

#### 2B 年寄りのやもめ 9-16

##### 1C 良い行い 9-10

##### 2C 若いやもめ 11-16

##### 1D 誓いの背き 11-13

##### 2D 再婚の勧め 14-16

### 3A 長老たちに対する判断 17-25

#### 1B 二倍の尊敬 17-18

#### 2B 訴え 19-25

##### 1C 公の責め 19-21

##### 2C 慎重な按手 22-23

##### 3C 明らかにされる罪 24-25

## 本文

テモテへの手紙第一5章を開いてください。今朝は、一節ずつ5章全体を見ていきたいと思います。今、パウロが、エペソにある諸教会を監督するテモテに、難しい判断をどのように下すかを、きめ細かく指導しています。当時、教会が大きく関わっていた、やもめの世話があります。今のように、福祉制度はないので、夫に死に別れた妻は生活が危ぶまれます。教会がそれに関わっていたのですが、やみくもにすべてのやもめを受け入れていいのか？というところではありません。そして、指導者自身についてです。それぞれの教会の集まりに立てられている長老が、もし罪を犯したらどうすればよいのでしょうか？苦渋の決断をしなければいけません。しかし、確たる証拠がないのに、教会から長老を追い出したら、それは神の前で大きな罪を犯すことになります。非常に難しい決断を、下さないとはいけません。

テモテは教会の指導者ですが、実は、みなさん一人一人、それぞれ与えられたところで、重要な、難しい決断を下していると思います。神は、ご自分のかたちに人を造られ、それは造られたものを支配するためであると、主はアダムに言われました。神のかたちに造られた者は、何かを治める働きをしています。その時の、テモテのように苦渋の決断をしなければならない時もあるでしょう。ある人を選んで、他の人を退けなければいけない時もあります。その時に正しい判断ができるの

は、どのようにすればよいのか？そういったことを考えながら、一節ずつ見て行きたいと思います。

### **1A 家族としての指導 1-2**

<sup>1</sup> 年配の男の人を叱ってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人には兄弟に対するように、<sup>2</sup> 年配の女の人には母親に対するように、若い女の人には姉妹に対するように、真に純粋な心で勧めなさい。

教会における接し方において、私たちが覚えておきたいのは、私たちは家族なのだということです。3 章でパウロは、教会のことを「神の家」と呼んでいます(3:15)。私たちの間にある関係は、ちょうど肉の家族にある関係と重なるのだよ、ということを、パウロがこの手紙で強調しています。

年配の男の人には、人前でなじるように叱ってはならず、父に対するように敬意をもって勧めます。そして、若い人に対して、年上の人とはかく、見下して、ただ言いつけてしまいがちです。けれども、兄弟に対するように平たく接していかないといけません。それから、女性に対して敬意が必要です。年配の女性には、母に対するように接します。そして、若い女の人ですが、テモテ自身が若い人なので、「真に純粋な心で」と言っていますね、女としてではなく、肉の家族の姉や妹と同じようにみなしなさいと勧めています。

ところで、家族というのは、とても不思議な存在です。切り離せない結びつきがあるので、愛憎の念はしばしば出てきます。はたから見れば、こんな激しい対立をしたらどうなるのだろう？と、とても見ていられない人間模様であっても、次の瞬間に一気に和合することさえあります。生き物というか、一つの体なんですね。そこに、杓子定規に人間的な善悪で外部が入り込むと、修復する関係が余計に悪くなり、回復するまでに長引くこともあります。会社や他の組織とは違います。主に導かれ、召された者たちが、互いに神の家族なのだと思うことにより、体の不思議な成長と修復を、私たちはキリストにあって体験できます。

### **2A 教会の助けるやもめ 3-16**

次に、やもめの世話について、教会がどのようにすべきかを、パウロがテモテに教えています。

#### 1B 本当のやもめ 3-8

#### 1C 身寄りのないやもめ 3-5

<sup>3</sup> やもめの中の本当のやもめを大事にしなさい。<sup>4</sup> もし、やもめに子どもか孫がいるなら、まずその人たちに、自分の家の人に敬愛を示して、親の恩に報いることを学ばせなさい。それが神の御前に喜ばれることです。

主の共同体が、やもめを助けるということは、旧約聖書の時から、律法の中で教えられていまし

た(申 10:17-18 等)今のような福祉制度のない当時は、夫のいなくなった人を助けることは、神の命令でした。ルツと姑ナオミはどちらも、やもめでしたが、落穂拾いをしていました。これは、主が律法で定めた命令で、彼女たちがひもじい思いをしないためです。

新約時代も、やもめは貧しい人を省みるように命令されています。けれども、今、「**本当のやもめを大事に**しなさい。」とパウロは、言っています。本当のやもめとは、全く身寄りのない人のことを指します。教会について知らなければいけないのは、第一に、教会の財産は当然ながら有限だということです。使徒の働き 6 章で、ギリシア語を話すユダヤ人たちが、自分のやもめたちが、配給でなおざりにされていると訴えました。言い方を変えれば、教会の予算は限りがあるので、偏りが出てきてしまいました。いろいろなところで、教会の中心的な活動、みとばによって養われるということができなくなってしまうからです。

しかし、全く身寄りのないやもめだけ助けるということのは、もう一つ、大きな目的があります。経済的な理由以上に、神は肉の家族をないがしろにされない、ということです。イエス様は、ご自分のみことばを聞いて、従う人々がご自身の兄弟であり、母であるということを言われました。霊的には、肉の家族から独立しています。けれども、それは関係を切るということでは全くありません。むしろ、肉の家族を世話することは主に喜ばれる事なのです。

繰り返しますと、神の家族と肉の家族は、家族ということで有機的につながっているのです。3 章で、「**自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会を世話することができるでしょうか。(5 節)**」と教えていましたね。このように肉の家庭は、神の教会とつながっています。

<sup>5</sup> 身寄りのない本当のやもめは、望みを神に置いて、夜昼、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、

教会において、やもめを助けることは、単に福祉制度ではないことが、はっきりと分かります。高齢の一人きりの女性であっても、主は大いにその賜物を用いてくださるということです。身動きができないその女性は、熱心に祈ります。祈りはどれほど、教会にとって大事な働きでしょうか！一人の働き人に、教会が支える意味合いさえあるのだ、ということです。

### 2C 自堕落なやもめ 6-8

<sup>6</sup> 自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても死んでいるのです。<sup>7</sup>彼女たちが非難されることのないように、これらのことも命じなさい。

やもめといっても、むしろその「やもめ」という境遇を使って、自堕落に暮らしている人たちがいました。これは、人の善意によって自分の欲のままに生きている人々です。家族がいながら、教会が

養うために名簿に入れている事例がいくぶんか、あったのでしょうか。そうすると、自分の時間を持って余します。主に仕えることや、従うことについて霊的な訓練を受けていません。そうすると、教会の中でも、悪いことをし始めます。お節介をしたり、噂話をしたり、そして遊び回っているようなことが起こるのです。この問題は、すでにパウロがテサロニケ人の教会に対する手紙、第二の手紙で取り扱っていました。「怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいる」(3:11)と言っています。

私たちは、とにかく、善意はすべてよいとみなします。しかし、人々の善意は、人をもっと悪くしてしまうことが、しばしばあることを知らなければいけません。海外の援助活動において、貧しいから物を上げるということが、どんなにその人々に悪影響を与えるか分からない、ということによく言われますね。生活保護も、生活保護課の方々は、そうったことをしっかり見極めて、本当に必要な人なのかどうかを調べるための訓練と経験を積んでいますね。教会も同じです。私たちキリスト者はとにかく、貧しいとか、困っているという、その「必要」を見て施してしまいます。いや、そのことは良い行いです。たとえ騙されても、その姿勢は変えてはいけません。けれども同時に、その人にも欲望があることをうっかり忘れてはいけません。貧しさとか困難な境遇を使って、自分の欲望を満たしていく道を歩んでいる人々がいるのだということをわきまえ知る必要があります。

そしてもう一つ大事なものは、本当のやもめは多くいることです。けれども、そうしたごく一部の自堕落なやもめがいるために、やもめ全般に対して疑いをかけるということが起こってしまいます。一部に悪い人がいると、いわゆる風評被害みたいなことが起こってしまうのです。だからこそ、私たちはしっかり、本当に事欠いているのかどうかの見極めが必要なのです。

<sup>8</sup> もしも親族、特に自分の家族の世話をしない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。

やもめを家族が養うことは、不信者の間でも行っていることです。不信者の中でさえ、扶養の義務を守っているのに、それを怠ったら不信者より劣っているのだとしています。自分は神の家族に入ったのだから、肉の家族は捨てたのだというのは、完全にみこころではないのです。こうした、人と人のつながり、というものが、ですから、神の家族は、肉の家族と連結しているのです。

## 2B 年寄りのやもめ 9-16

そして、パウロは、今のテモテが置かれている諸教会の状況を踏まえて、具体的なガイドラインを教えます。

## 1C 良い行い 9-10

<sup>9</sup> やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満ではなく、一人の夫の妻であった人で、<sup>10</sup> 良い行い

によって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助けるなど、すべての良いわざに励んだ人にしなさい。

二つの条件があります。一つは、年齢です。六十歳未満ではない、とありますが、当時の平均年齢は今よりもっと低かったでしょうから、かなりの高齢の人たちだけを受け入れます。もう一つの条件は、「良いわざに励んでいた」ということです。良いわざは、家庭においても、教会においても、どちらにおいても良いわざに励んでいたということです。

「一人の夫の妻」とありますが、夫をとっかえひっかえしていたような女ではない、ということです。そして、子どもをしっかり育てていたということ。もう一つ、旅人をもてなす、ということですが、これも旧約時代から命じられていることです。当時の社会状況は、旅人が外泊すると、盗賊によって襲われることがしばしばあったので、文句なしでもてなすという文化がありました。そして、同じように聖徒の足を洗うことも当時の文化に則している物です。イエス様が弟子たちに足を洗われましたが、ほこりだらけの足をしもべが洗うことになっています。今で言ったら、トイレ掃除とか、汚れ仕事の部類に入るでしょう。そして、困っている人を助けているなどです。

このようなことをしてきた人であれば、生活費が与えられても、それによって欲を出すことがない、節制することのできる御霊の実を結んでいるということです。

## 2C 若いやもめ 11-16

### 1D 誓いの背き 11-13

<sup>11</sup> 若いやもめの登録は断りなさい。彼女たちは、キリストに背いて情欲にかられると、結婚したが<sup>り</sup>、<sup>12</sup> 初めの誓いを捨ててしまったと非難を受けることになるからです。

ここの「初めの誓い」とは、やもめとして生きるという誓いです。今、読み進めれば分かりますが、やもめが再婚してはいけないということではありません。そうではなく、自分はやもめとして生きていると誓ったからこそ、教会がその生活費を養っているのに、そこで生活に余裕が出て来て、欲を出して、ふらふらと生活して、それで男を見つけて一緒に住んだ、みたいな場合を、パウロは取り扱っています。そうすると、「教会は、そうやって、ふしだらに生きることを助けるところなのか。」という非難を受けかねません。

<sup>13</sup> そのうえ、怠けて、家々を歩き回ることを覚えます。ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話さなくてよいことまで話すのです。

すべて、キリストのゆえ、などといって、うわさ話をしたり、おせっかいをしたりするのは、キリスト者の間で、ある罪については必死に避けていくのに、他の罪については放置したままにすること

が、多々あります。うわさ話はその一つです。確かな証拠もないのに、人の評判を下げる話、悪口を言い広めます。世の中ではよく起こっています。しかし教会ではあってはならないのに、それで、キリストの名を使ってうわさを広めます。「どうか、このことについてお祈りください。」といいながら、言ってはいけないことを広める手段にしたりします。陰口について、箴言は次のように警告しています。「26:20-22 薪がなければ火が消えるように、陰口をたたく者がいなければ争いはやむ。炭火に炭を、火に薪をくべるように、口論好きな人は争いをかき立てる。陰口をたたく者のことばは、おいしい食べ物のように、腹の奥に下って行く。」

私たちは、そうした問題が起こると、何とかそのしていることに対処しようとはしますが、そもそも、そのように誘惑されていくものがたくさん出てくる環境に置いてしまっていることが、教会の決定としての問題なのです。私たちが、落ち着いた生活をするように手助けするのが、教会の役目です。

## 2D. 再婚の勧め 14-16

<sup>14</sup> ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子を産み、家庭を治め、反対者にそしる機会をいっさい与えないことです。<sup>15</sup> すでに道を踏み外し、サタンの後について行ったやもめたちがいるからです。

比較的、若い女性にとっては、このように新しい家庭を築くことが落ち着いた生活です。まず、生活を安定させることは、霊的な健全さを保つ道でもあります。

パウロが、かなり大胆にテモテに具体的な指導をしているのは、道を外して、サタンの後について行ったやもめがいたようです。パウロは、この手紙の中で、サタンが確実に働いていて、神の家族を台無しにしようとしていることを意識しています。監督の資格について、信者になったばかりの人は、高慢になって、悪魔と同じさばきを受けてしまうから、監督にならないように。教会外の人に評判が良い人でないと、あざけられて、悪魔の罠に陥ってしまうということも話しています(3:6-7)。

教会が、霊の戦いの場であると知っていく必要があるでしょう。ある人は、罪を犯して離れないまま、信仰からも離れます。またある人は、違った教えを受け入れて、教会を分裂させようとはします。そして、またある時は、教会外の人から、教会の中で起こっていることについて、嘲られるようなことをします。そうやって、サタンが教会の証しを台無しにしようとしているのです。そういった攻撃から、いかに教会が守られるのか、監督の働きについている者たちは目を光らせないといいません。

<sup>16</sup> もし信者である女の人に、やもめの身内がいるなら、その人がそのやもめを助けて、教会に負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会は本当のやもめを助けることができます。

ここはおそらく、金銭的な負担ではなく、お世話をする人の話をしているのでしょう。先ほどは、子



どもや孫の話をしていましたが、それは主に金銭のことです。女の人、と言っているのです、日頃の世話のことを話していると思います。下の世話や、体を洗うなどの世話がありますから、女性でなければできないことです。

やもめについては以上ですが、今の時代はどう考えればよいでしょうか？それは、家族の扶養については、すぐに直接、当てはめることができると思います。それから、生活保護など、今の福祉制度でまかなうことができるのであれば、役場をお願いします。本当に身寄りのないやもめを、今に当てはめるならば、教会の働きを継続的にしてきて、また家庭も治めて来たような方が、老齢になって家から出て行けないぐらいになっても、熱心に祈っているその働きを支えるという意味で、生活費をあてがうであるとか、教会の働きとして支えることができるのではないのでしょうか？

ある人が、自分の教会が、ホームレスになりそうになっているシングル・マザーを助けるのではなく、教会の経費にほとんどの予算がまわっているということで非難していました。私は、それはちょっと焦点がずれていると思いました。本当の身寄りのない人のために、今の時代は福祉制度があります。セイフティーネットがあります。そして、霊的な事柄に関わっている人で、そういった貧しくなっている人がいれば、教会は優先して助けて行くべきでしょう。

### **3A 長老たちに対する判断 17-25**

本当に難しい判断を迫られますね。次も同じです。長老に対する取扱いです。長老とは、教会の指導者で、監督や牧者と同じ人々のことを指しています。

### **1B 二倍の尊敬 17-18**

<sup>17</sup>よく指導している長老は、二倍の尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのために労苦している長老は特にそうです。<sup>18</sup>聖書に「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない」、また「働く者が報酬を受けるのは当然である」と言われているからです。

長老は、まず基本、尊敬を受けなければいけないというのが、パウロの命じていることです。ここで大事な言葉があります。「よく指導している」ということです。ただ、そういった立場にいるから尊敬を受けるべきということではなく、骨折って良く指導している長老であれば、それにふさわしい尊敬を払うべきだということです。ここで言っている「二倍の尊敬」とは、心で思いの中で尊敬することだけでなく、物質においても、その尊敬を示すことです。それは、次の 18 節で、物質的に報酬を支払うところで表れています。

物質的な尊敬の前に、尊敬全般について話しますと、これはとても大事な要素です。上に立てられている人、為政者であっても、それは神の与えた権威であることを、使徒たちは教えています。つまり、いろんなところについている人々を、それにふさわしい敬意を示すことは、神が生きて働い

ておられることを知ることができる恵みにあずかる、ということです。

私は、バイブル・カフェのチラシを配っている時に、時々そうやって祈っています。例えば、若いお母さんが小さな子を連れて歩いている時に、お母さんは偉いな、と思って、ちょっとした敬いの心が出てきます。どれほどの犠牲を払っているだろうか、と思うわけです。また、男性が暑い中でスーツを着て歩いているのを見ると、そこには家族がいて、養っているために働くのですが、偉いなと思うのです。高齢の方が歩いているのを見ると、人生いろいろなところを通って来られたのだ、という敬いの思いが出てきます。若い子でも、こんな大変な時代に生まれて、頑張っ生きて来てね、という思いが浮かびます。その中で、この方々がイエス様を知ってくれたらと願うわけです。霊的な指導者であれば、そのような自然な敬いできていて、語られるみことばを、事実、神が語られているものとしてそのまま受け止められるという恵みがあるのです。

そして、物質的な尊敬ですが、これは常識を当てはめるとするのが良いかもしれません。みことばと祈りのために多くの時間を割けば、普通に生活の糧を得ることができません。パウロは、また別の目的があって、自分自身で生活費を賄いながら、宣教の働きをしましたが、本来はそうではないことを、手紙の中で数多く語っています。普通は、生活の糧を得ることはできません。そこで、主ご自身は、そして聖書は、その霊的な働きに対して物質的な報酬を得るのは当然であるとしているのです。そのことによって、その人の生活が賄われるということです。

まだキリスト者になっていない人は、そういった意味での常識を持っています。「教会の牧師さんて、どうやって生活しているの？」と驚きます。すぐに生活の糧のことを考えるのです。ところが信者になるとなぜか、そういったことを忘れてしまいます。偶像化するというか、主の働き人が、人間であることを忘れるのです。何でもできる、信仰で主が守ってくださると考えるのです。いつの間にかどこかで、「霞を食べて生きられる」と思っています。大事なのは、それは働き人たちが抱くべき信仰であって、それを当事者でない他の信者が要求したり、勝手に期待したりすべきことではないのです。

また話を戻しますと、神の家族は、肉の家族と連続しています。神の家族は地から浮いた存在ではなく、地に足のついた存在です。人を人として思いやるという関係性によって成り立っています。ですから、二重の尊敬というの、自明のもの、当然の権利としてみなします。

## 2B 訴え 19-25

しかし、そのように尊敬を受けるべき存在が罪を犯したら、どうするのか？次で取り組みます。

## 1C 公の責め 19-21

<sup>19</sup>長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。



律法の中にあり(申命 17:6)、新約聖書の中にも、何度となく引用されている神の掟は、「二人か三人の証人」です。イエス様が、兄弟が罪を犯した時に、そのことを二人だけで責めても悔い改めないなら、自分の他に一人か二人、連れて来なさいと言われました(マタイ 18:16)。

これが極めて大事な手順であり、前回のメッセージでもお話しましたが、初めに訴える人の訴えは、次の証人が来るまで、正しく見えるのです。「箴言 18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。」みなさんも、だれか教会の指導者でこんな悪いことをしているという訴えがあっても、そのまま信じないでください。もっと調べるか、章の終わりで勧められていますが、主ご自身に判断を任せてください。

<sup>20</sup> 罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。そうすれば、ほかの人たちも恐れを抱くでしょう。

イエス様が、罪を犯している兄弟がいる時に、二人、三人の証人があっても悔い改めない時は、教会に伝えなさいと言われていています(マタイ 18:17)。しかし、長老の場合は、徹底的な調査の結果、事実と判明したら、そのまますべての人の前でそのことを伝えます。そして、その人を教会から外すことを発表しなければなりません。尊敬を受けなければいけない人が、罪を犯したのですから、それだけ重い責任があるからです。そして、主ご自身の罪を犯した者に対する裁きが厳しいこと、他の人々が恐れを抱くようにすること、ここが主の教会であること示すためにも必要なことです。

<sup>21</sup> 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます。これらのことを先入観なしに守り、何事もえこひいきせずに行いなさい。

先週、じっくりと学んだ部分ですね。私たちはとにかく、偏見を持ちやすい存在です。しかし、私たちの神はえこひいきをなさらない方です。ですから、主を畏れて、先入観なく、えこひいきせずに行わないといけません。

### 2C 慎重な按手 22-23

<sup>22</sup> だれにも性急に按手をしてはいけません。また、ほかの人の罪に加担してはいけません。自分を清く保ちなさい。

按手とは、手を置いて、何かの働きに神が召しておられることを認める行為です。すでに主に召されていることが認められている人々から手を置いてもらい、祈ってもらい、そして主の働きに従事します。パウロとバルナバが宣教の働きに遣われる時に、聖霊から彼らを聖別して、働きに付かせなさいという聖霊の声があって、それで「彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。」とあるのです(使徒 13:3)。そして、この按手を性急にはしてはいけないと言っています。

そうですね、不適格な者を主の働きに従事させたら、教会への傷は甚大なものになります。まさに、サタンの餌食になります。そこを、慎重に、よく精査した上で、主の働きのために按手します。

そして、「ほかの人の罪に加担してはいけません。」とありますね。これは、自分が悪い働き人のしていることに是認するようなことをして、自分自身は悪いことをしていないけれども、その是認や関わりによって、その悪に加担しているような場合です。これを極力避けて、自分を清く保ちなさいということパウロは教えています。

私はある時に、自分の書いていることに対して強い批判を個人的に受けたことがあります。なんでこんな強く反応しているのか、分からなかったのですが、よく聞いていくと、私自身ではなく、私の周りに集まってきている人々の中に、悪い働き人がいたとのことなのです。私がそれを是認していることによって、私自身がその一味ではないかと、外部の人たちが見て思ってしまう、というご指摘でした。それは、尤もでした。その悪い働き人によって多くの傷を受けている人たちがいる以上、自分の働きまでが、そしりを受ける可能性があるからです。

<sup>23</sup> これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のために、少量のぶどう酒を用いなさい。

この文を読んで、みなさんはどう思われたでしょうか？アメリカ人の聖書教師が語ると、必ずお酒は読んでよいのかよくないのか？という議論になります。けれども、そこが焦点ではないんですね。テモテを自分の信仰の子のように思っているパウロが、これら非常に難しい判断を下さないといけないテモテが、元々、臆病な性格のところではなければいけないので、腹痛を起こしていると想像できるのです。胃もそうですし、他の病気もたびたびかかっているようです。滋養のために、少量のぶどう酒を用いなさいと言っています。

### 3C 明らかにされる罪 24-25

そして、私たちの判断で、特に難しい判断や決断をしなければいけない時に、最も大事なことをパウロは、次に書いてくれています。

<sup>24</sup> ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。<sup>25</sup> 同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままでいることはありません。

今、明らかにされていることは一部なのだ、ということです。24 節は悪いこと、罪についても、明らかにされているのは一部だということ。25 節は、良いことについても明らかにされるのは後なのだ、ということです。明らかにされているものもあるのですが、後で明らかにされるのです。これを知

るだけでも、安心すると思います。

私たちは、明らかにされていないことに不条理を感じます。なぜなら、どうしても怪しいのに、どうして裁かないのか？あるいは、神は裁かれないのか？ということですね。また、テモテのように、教会内部で裁かなければいけない人にとっては、証拠が十分にそろっていないのに裁くことが出来ず、もどかしい、つらいと感じます。重責が自分に押しかかって来て、潰れそうにさえなります。けれども、神が必ず後に明らかにされると知っていれば、肩の荷が下ります。今、判断を下さなくてよいのだということです。

そして、悪いことが起こっている時に、みなさんに励ましたいことは、良いことに集中することです。25節には、今は明らかにされていない良いことがあります。みなに知られていないけれども、後に明らかにされます。悪いことが起こっても、良いことを忠実に行っていけば、必ず、光が闇に打ち勝ちます。主が、その隠れている良いことを明らかにしてください。